

今回のタイトル「馬小屋」を見て、「おや」と感じた方もおられるかもしれません。以前ある所でネイティビティ(イエス様の降誕の場面をあらわした置物)を準備している時に、一緒に手伝ってくれた人がこんなことを言っていました。「あれ、この馬、角が生えている」。

「それは馬じゃなくて牛なんだよ」。しかし彼が馬だと思えるのも、無理はありません。幼稚園や保育園の降誕劇でも「イエス様は馬小屋で…」と説明されますし、賛美歌にも「馬槽(まぶね)」や「馬屋(うまや)」という歌詞が多くみられます。

しかし聖書を見てみると、「馬小屋」という記述は出てこないのですね。飼い葉桶(ファトネー)という語が出てくるだけなのです。ですから正確には「家畜小屋」と考えたほうがよさそうです。

なぜイエス様は家畜小屋で生まれたのでしょうか。宿屋には泊まる所がなかったと聖書は伝えます。しかし、イエス様がもし宮殿やお城、立派な家にお生まれになっていたとしたらどうでしょう。わたしたちから遠く離れた存在として、感じてしまうのではないのでしょうか。

イエス様はわたしたち一人一人の心の中にも、お生まれになります。宿ってくださるのです。わたしたちの心はピカピカの部屋ですか。それとも家畜小屋のように、人には見せられない、暗く汚れた所ですか。

イエス様が家畜小屋にお生まれになったこと、それは罪深いわたしたちとも関係をもってくださいることを意味するのです。

ちなみに、なぜ今回のタイトルを「家畜小屋」とせずに「馬小屋」としたのか。その理由は簡単です。「う」から始まる他の言葉が思い浮かばなかったからなのです。

次回は「永遠の命」です。お楽しみに。



「羊飼いの礼拝」

アントニオ・アッレグリ・ダ・コレッジョ

(1489~1534年)

ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

(ルカによる福音書 2章6~7節)

